

ふらんす 2005年10月号

◆松原秀一／評

原野 昇著

『フランス中世の文学』

(広島大学出版会、1875円)

中世文学を知るための好著

長年『狐物語』のγグループ写本の研究に携わってこられた広島大の原野氏が20年来、雑誌や編纂物に寄稿された論文に加筆してまとめられた本で、通読してフランス文学の起原から15世紀末までの概観が得られるようになっている。

『狐物語』のC写本とM写本の研究と校訂でパリ大学で博士号を共に取得した原野氏と福本直之氏が鈴木覚氏の協力を得て刊行した校訂版は、今や『狐物語』の国際的標準校訂版となっているばかりか、抜粋がLes Lettres gothiques叢書に『動物叙事詩学会』の名誉会長Gabriel Bianciotto氏の現代フランス語訳と対訳で入ったほどで、福本氏と原野氏は交互に国際動物叙事詩学会長に選ばれ、原野氏はこの8月にミュンスターで開かれた学会に出かけられたばかりである。

本書を通読すると、時々原野氏の関心の変遷を如実に見る思いをするが、中世の文学作品に写本で触れることがいかに眼を鍛えるかを感じさせられる。リットレ、ゴドフロワやガストン・パリシ、ホル・メイユエルの時代と違って、これほど校訂本が多く出た今では19世紀以後の校訂版に頼らず中世文学を論ずることは難しいが、近代の校訂版は結局、校訂者の判断による読みであって、見ように

よっては新しく加えられた写本と考えることもできる。中世の写本にしても、作者の書いた写本は14世紀以前に遡るものではなく、どれも原作が作られてから百年近くは経って写本の形になったものである。しかも現代に伝わる写本の他に、失われた写本もあったと考えねばならず、研究者たちは残された写本から原作の姿を求めようと努力をするわけで、校訂版製作もその努力の一つであるが、そのため校訂版を使うには、写本に触れて、そこから校訂版がどう作られていくかを实地に知ることが欠かせない。

中世の作品が写本によって姿がかなり違うことは19世紀に中世文学を「再発見」した学者たちもよく知っていた。ガストン・パリシがパニエと『聖アレクシス伝』の古典的校訂版を作った時は各世紀の伝承を校訂版で示したし、『ロランの歌』でもコシュヴィッツからラウル・モルティエまでオクスフォード写本以外の伝承も校訂版を作っている。最近ではこの写本による『揺れ』をmouvanceとして中世文学の特徴と捉える研究者もいるほどである。この『揺れ』こそ叙事詩研究のレンセスヴァルス学会、アーサー王学会誕生の基となった。どちらも3年ごとに国際学会を開いている。

中世研究の進展に注意を怠らない原野氏は、本書でもジャン・リシュネル、リバル、メナルなどその時々新しい視座にも目配りしている点も特記すべきである。著者の後進を育てようとする配慮も感じられる好著である。

(まつばら・ひでいち)